聖霊降臨後第２６主日（特定２８）　　大きな苦難を予告する　　２０２４．１１．１７．

３年ほど前のことですが、テレビを見ていたら、東日本大震災で津波を受けたが、先生たちの指導で児童たち９５人は、みんな山の高台に逃げて無事だったという、福島県浪江町請戸（うけど）小学校が、津波に被災した状態のまま保存して公開されることになった、ということでした。そして当時小学生だった人たちが、それぞれ別の町に住んで、両親を津波で亡くした人たちが、たくましく生きている様子が放送されているのをみたことがあります。

いろんな苦労をしながらも、多くの人たちに支えられて、それぞれがこの１０年余りを生き抜いてきたんだなあ、彼らのこれまでの生活を思わされました。１３年前、人間の平凡な生活が、あっという間に取り去られたことを考えると、津波の恐ろしさを改めて感じました。

皆さんは、あの頃言われていた、津波が襲って来た時の対処の仕方を覚えておられますか。津波がやってくるのを知ったら、山に必死で逃げなければならないこと。家に忘れ物を取りに引き返してはならないこと。など、大震災では、いろんな注意事項があることを学びました。

ところで、今日の福音書にも同じようなことが書かれています。これは、何を語っているのでしょうか。

先週とその前の日曜日。私たちは、福音書を通して、イエス様が過ぎ越しの祭りのためにエルサレムに登った人々と、神殿で議論したこと。人々の献金する様子を見て、弟子たちに献金など、ささげものについての話をしておられたことを見ました。今日の所は、そんなエルサレムの神殿を後にして、オリーブ山を越えてベタニアに帰る途中、エルサレムの都を振り返りながら、この都がやがて滅ぼされることを予告されている場面です。

そして、「山に逃げなさい」と、イエス様が言われているのは、今イエス様と弟子たちがベタニアへ帰ってゆく、そのオリーブ山への道を、４０年後には、このマルコによる福音書の読者にも、逃げなさい、と警告している言葉なのです。その話をしましょう。

エルサレムという町は、標高８００メートルという丘陵地帯にあり、周囲は谷で囲まれています。ここにある神殿や町には、津波がやってくるわけではありません。やってくるのは、外国の軍隊です。エルサレムの町は、何度も外国に滅ぼされた歴史があります。

今日の旧約聖書のダニエル書は、イエス様の時代より２００年近く前に、イスラエルの北側、シリアの軍隊が占領して、神聖なエルサレムの神殿を汚すことについて、語っています。そして福音書の方は、このあと４０年位して、ローマ帝国が軍隊を連れてきて、都を滅ぼすことを予告しているのです。

しかし、単純にローマ軍がユダヤ人を滅ぼした、という話ではありません。このユダヤ戦争を記録したユダヤ人ヨセフスは、その本の中で、ローマ人によって殺されたユダヤ人より、ユダヤ人によって殺されたユダヤ人の方が多かったことを書き残しています。これは、あとで話しましょう。

今日の福音書の直前、イエス様が、エルサレムの都の滅ぼされることになる予告をされるので、弟子たちは質問しています。「この立派な神殿が、いつ倒されるんですか。その時にはどんなしるしがあるんですか。」ということです。

それに対して、イエス様は「人を惑わす、偽者の指導者が出たり、戦争が起こったり、地震や飢饉も起こる。そして、クリスチャンに対する迫害も起こるし、親子が殺しあうことも起こってくるだろう。でも、今から取り越し苦労をしないで、じっと耐えなさい。最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」とイエス様は弟子たちに語られました。

こう言われてから、今日の福音書が始まるのです。今日の福音書の最初をもう一度読んでみましょう。

『憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら――読者は悟れ――、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。』

「憎むべき破壊者」というのは、「主なる神様を認めない、ほかの権力者」、あるいは「他の権力を象徴する偶像」のことを指しています。そして、「立ってはならない所に立つ」というのは、主なる神様だけがそこであがめられなければならない、エルサレムの神殿に、偶像や異教徒の者たちが立つことです。

今日の旧約で、省略してもいいことになっている、ダニエル書１２章１１節に「日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから、千二百九十日が定められている」という文章があります。「憎むべき荒廃をもたらすものが立てられ」るというのは、その当時、イスラエルを占領していた、北側の大国シリア軍が神殿に立てたギリシャ神話のゼウス像のことを指しています。

しかし、福音書で語っている、紀元７０年にローマ軍がエルサレムの町を取り囲んだ時に、『憎むべき破壊者』になったのは、ローマ兵ではなく、ユダヤ人そのものだったのです。

ローマ軍は攻めてくる時、エルサレムの人々を兵糧攻めにしました。城壁に囲まれたエルサレムの町に、水や食料が入るのを止めてしまい、中のユダヤ人は飢えに苦しみました。そして、町の中でも丈夫な建物である神殿を軍事基地にしてしまったのです。ユダヤ教の祭司たちだけが入ることを許されている、平和な神殿が、ユダヤの軍人たちに使われて、立ってはならない神殿に立つことになったのです。そして食料がなくなります。東のオリーブ山に陣取っていたローマ軍に投降する人々だけが、生き延びたのでした。

しかし、投降できた人々はわずかで、多くの人はエルサレムの城壁の中で飢え死にさせられていったのです。それで、ユダヤ人によって死んでいったユダヤ人の数が多かった、というわけです。親子が殺しあうことになる、というのも、兵糧攻めの中で、篭城している人々の運命を言い当てたのでしょう。

「読者は悟れ」「ユダヤ人は山に逃げなさい」という言葉は、町に留まって、飢え死にするのではなく、ローマ軍に投降してでも、生き延びなさい、という警告の言葉だったのです。

ユダヤ人たちが、今まで味方だと思っていた同胞のユダヤ人自身が敵になり、敵と思っていたローマ人が味方になる、という現象を、この時の人々は味わったのです。この時投降して、生き延びたクリスチャンは、東のヨルダン川を渡って、ペレヤという地方に住んだ、と言われています。

また、エルサレムの神殿が崩壊したのは、ローマ兵が打ち壊したわけではありません。彼らは神殿を残すつもりだったのですが、戦争によって火災が発生して、神殿にまでその火が移り、崩壊したようです。

さて、今日の話は悲惨な状況を説明しているだけで終わっているのですが、その後には、「人の子が来る」というお話に展開しています。多くの苦難の後に、人の子、つまり救い主メシアが力と栄光を持ち、雲に乗って来ることを語っておられます。これがないと、福音にはならないのです。これが肝心。

さて、イエス様のこの大きな苦難を予告したお話を、現代のわたしたちはどのように受け止めたらいいのでしょうか。

弟子たちが、エルサレムの崩壊について、イエス様に質問した時、戦争、地震、飢饉、迫害、親子での殺し合いなど、イエス様は世の悲惨な出来事をほとんど語られた後で、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」とおっしゃいました。耐えながら生活していく先に、救い主が来る。必ず希望はあるんだ。という教えです。

ローマ軍に囲まれ、今まで味方であり同胞と思っていたユダヤ人が敵になり、敵と思っていたローマ軍に投降することで生き延びられる、という逆転を、福音書を書いた人々はどう思っていたのでしょうか。

現代に目を向けると、戦後わたしたちを支えていたと思っていた国や政治家たちが、実は国民を苦しめながら、自分たちの利益だけを考えていたことが、あらわになってきました。

今まで、あたり前に頼りにしていたものが、実は全く頼りにならないものであったことが明らかになったり、自分達の生活が、国によっても保証もされないような、私たちが希望を見失うことが多くなったのではないかと思います。

しかし、最初に言いました、東日本大震災の津波を体験した、請戸（うけど）小学校の、当時小学生だった子どもたちが、両親を津波で失った何人かも紹介されていましたが、周囲の人々の親切で今日まで生きてきたことを思うと、この苦難を超える生き方を教えられたように思います。

今日の福音書の直前には「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と言われているし、今日の福音書のあとには、「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る」と言われています。

どんな暗い世の中であっても、神の国がやがてやってくるのだから、耐えてゆこう、というのがこのマルコ１３章のメッセージのように思えるのです。それはクリスチャンではない請戸（うけど）小学校の子どもたちにも力を与えてきたのではないかと思うのです。